学位論文内容の要旨

論文提出者氏名	金崎　惣一

（論文題目）

音楽教育における〈図形楽譜としてのソノグラフィー〉
――音環境と音楽表現を取り結ぶ記譜法として――

（内容の要旨）

日本において，音楽という言葉から多くの人々が連想するのは，おそらくドレミファソラシドで構成されている音楽である。明治期に西洋音楽が移入され，公的な音楽教育（唱歌教育）が全国へと広がった。このような背景にあり，物珍しかったはずである西洋音楽はわれわれにとっては当たり前すぎるほど身近な存在となった。この影響は，公教育の指針である学習指導要領にも通じている。しかしながら，音楽教育研究の領域で広まった新しい音楽学習の指標は，従来の音楽学習にはあまり見られない創作経験を与える機会を生んだ。この指標は学習指導要領へも影響を与えたが，それによって生じた問題が，従来の音楽教育において用いられている楽譜では，新しい音の要素，すなわちわれわれが生活する中で意識的に聴くことの少ない自然の音に対応しきれない，ことであった。

本研究では，新しい音の要素に対応しうる記譜である図形楽譜を用いることで，身の回りのさまざまな音の聴取－記譜－音楽創作を連関する活動の提案，音楽教育における有効性を検討することを目的とした。これまで音楽教育研究では〈楽譜〉，〈読譜〉に関するさまざまな議論が行われてきたが，その中で扱われる楽譜の多くは西洋音楽に由来する五線譜であり，それゆえに現実環境において鳴り響く音とそれらの関連について論じられることはなかった。現代音楽の文脈に構想された図形楽譜は，産業革命以降誕生した新しい音素材に対する記譜の改良，その試行錯誤の一端である。この楽譜を音楽教育的視点から捉え，楽譜を用いた活動における〈解釈の多様性〉をその有用性として示した。サウンドスケープ研究では，音環境の情報を視覚的に表す試みとして，ソノグラフィーと称される表記法が用いられる。「部分」から「全体」へと音環境の情報を整理しようとする既存のソノグラフィーは、点々とした聴取体験の集積物であり、個人が連続的に体験した音響情報を記述することを目的としていない。また音響情報を記述するにとどまり、それが音楽表現へと昇華されることはない。そこで本研究では，「音環境を記述する」というソノグラフィーの特性を維持しつつ、それを音楽表現へとつなぐために、ソノグラフィーを図形楽譜として扱った。

図形楽譜としてのソノグラフィーは、音環境の聴取－音楽表現を連関するための媒介として機能すると考え、それを用いた音楽教育プログラムを構想した。さらに中学校での実践の観察，実践に関わった教師へのインタビュー調査を行い，本プログラムの特性について考察した。結果として，本プログラムは，現実環境に鳴り響く音の聴取，音環境を記すソノグラフィー，音楽創作を容易にする図形楽譜の連関を可能にするものであると示した。また，インタビュー調査において提起され，過去のワークショップを分析したところ，活動者の属性を問わない，ボーダーレスな活動としての可能性も見いだすことができた。

キーワード：図形楽譜，ソノグラフィー，サウンドスケープ，創造的音楽学習，学習指導要領，五線譜